

## 【演題名】

Multinucleated blastomeres は Day3 での胚選択評価における指標とはならない

## 【発表者名】

中西 麻実<sup>1</sup> 稲場 美乃<sup>1</sup> 村重 紘志<sup>1</sup> 水野 里志<sup>1</sup> 井田 守<sup>1</sup>  
福田 愛作<sup>1</sup> 森本 義晴<sup>2</sup>

<sup>1</sup>IVF 大阪クリニック、<sup>2</sup>HORAC グランフロント大阪クリニック

## 【目的】

移植胚の選択には従来形態学的評価や発育速度が用いられていた。近年、タイムラプス (ES) の導入により培養環境を維持して胚の連続観察が可能となり、新たな胚評価法が導入されつつある。初期胚発生において、多核(Multinucleated blastomeres :以下 MNB)は一定の確率で発生し、MNB が見られた胚 (MNB+) は見られない胚 (MNB-) と比較し、流産率の上昇や妊娠率の低下が報告されている。しかし、従来の評価により MNB+が除かれているならば、必ずしも MNB を観察する必要はないと思われる。このため、Day3 良好胚選択において、MNB の有無が有効な指標になり得るか検証した。

## 【対象と方法】

2013 年 6 月～2016 年 12 月までに ICSI 症例で ES による Day3 までの観察培養を行った 84 症例 91 周期の移植可能胚 241 個を対象とし以下の検討を実施した。従来形態学的及び発育速度による胚評価法 (従来法) と MNB を加味した評価法 (MNB 法) のそれぞれの評価法で周期ごとの最良好胚を決定した。この 2 つの評価法で最良好胚が異なる周期の割合を算出し、さらに MNB 胚を移植した 22 周期の予後について検討した。なお MNB 法では従来法の優先順位の中で MNB 胚を最下位に位置づけた。このため、全胚で MNB が認められた周期の順位は従来法どおりとした。

## 【結果】

従来法と MNB 法で最良好胚が異なった周期の割合は 37.4%(34/91)であった。MNB+胚と -胚の胚移植当たりの妊娠率及び生産率は、それぞれ 31.8%(7/22) vs 33.3%(3/9)、22.7%(5/22) vs 22.2%(2/9)で、有意差は認められなかった。

## 【考察】

MNB を胚評価の指標とすることで、従来法で選択された最良好胚が変更になる症例の割合は約 37%であった。今回は分割期胚が複数個得られた症例のみを対象としているが、分割胚が 1 個しか得られず選択の余地のない症例では、MNB 評価の必要性はさらに低下する。さらに、MNB 胚を移植した場合でも 5 例出産例が得られていることから、MNB 評価法単独では、Day3 良好胚選別の有用な指標となりえないと考えられた。